

時空融合の次の日。さざなみ寮の人間は全員、リビングに集まった。
そして、これは一体何の冗談なんだろうかと全員頭を捻ったのである。

まあ、簡単にいえば。

「...美緒、お前...また、か？」

「あれ、耕介...ちょっと若くなってる？」

まず、陣内美緒　多くのさざなみ寮生にとっては小学生である　が大きくなっていた。

そして。

「...あの一。見慣れない人がいるんだけど...。」

そのあとに仁村知佳　さざなみ寮の天使A　の声。

その彼女の対象は子狐を抱いた少女を始めとした幾人かを指していた。

本来ならいろいろと騒ぐところだったが、このさざなみ寮は一味違う。

銀髪の少女、リスティ　ちなみに天使B　は遠慮なくテレパシーで相手の頭を探り...そして、判明する。

「ああ、この人たちもさざなみ寮生みたい。　しんじられないけど、僕らの知らない未来からの。」

「ええええええええ！？」

まあ、もともと「なんでもあり」なのをあっさり受け入れるのがさざなみ寮の伝統。奇妙な自己紹介（なんというかぼけと突っ込み満載の）のあとに幾つか判明したことがあった。

まずは神咲姉妹だろう。妹と姉の年齢が同じだということ。一部の人間はこれには大爆笑していた。

「那美...、高校3年...！？」

「うん、そうだよ。薫ちゃんは？」

「うちも高校3年...。」

「...え`」

固まる那美。

さらに追い討ちをかけたのは美緒がすでに高校生という事実。

「にやはははは。薫と同じだ~。」

この言葉に薫が固まったのだった。

ちなみに正確には一年下なんだが。

その一方でちょっとブルーな話もある。

「あーだめだ。ゆうひのやつは居ないよ。」

「そうか...。」

イギリスに留学してしまったゆうひはさざなみ寮には居ないという事実は年長者組を落胆させた。

「さっき、GGGとかいう組織の放送があったけどな...。ゆうひとは会えない可能性があるぞ。耕介。」

「...そうか...。」

仁村真雪 さざなみ寮で一番の大人 の言葉にすこしおちこみの色を見せる耕介。

その後、管理人はあんまり変わってないだとか、オーナーがまだ獣医科大学に通っている...未来サイドのメンバーにとっては獣医なのだ...こととか、いろいろだった。

「こうなると外がある意味楽しみだねえ。」

真雪はそうってビールを一本のみ干す。

「瞳とか...相川君とかはどうなってるんだろうな？」

耕介の言葉に、「さてな」と真雪は返す。

「ま、うちの人間はおおむね増えてるんだ。外の間人もおおむね増えてるんじゃないか。うちの知り合いに関して言えば。」

「...増えてたら増えてたで戸惑いますけどね。初顔合わせの時は。」

苦笑して、真雪の言葉にこたえたのだった。

「でも、私が一部の人間にとっては結婚してたなんてちょっと驚きですー。」

オーナーの榎原愛が酒飲みの輪に加わる。

「だな。ゆうひのやつも、新メンバーにとっては雲の上の 　　というか芸能人なんだからな。」

真雪が途中で言い直したのは、どう考えても、雲の上の人物という感じには絶対なれないゆうひの人柄と...二度と会えないという意味を払拭するため。

「ま、あたしらにとっても、あいつらにとっても、ゆうひは家族だけど...普段はここにはいないからな。日常には影響ないさ。」

「俺は多分、真雪さんほどには達観できないと思いますよ。」

耕介はどこか影を帯びた声でそう告げる。

「時間が癒してくれるさ。」

真雪はそういうと新メンバーをからかいに耕介から離れた。

「耕介さん」

「...愛さん...。」

「きっと、ゆうひさんも居ますよ。ただ、さざなみ寮ではないだけです。」

「...そうだな。きっとすぐに『たっだいまー』といって帰ってくるよな...」

SSFW Outside Story

新世紀アリス伝 / Face Earth

Ep02. 季節はずれの恐ろしさ

E = PART

>Time 17:10

5人はついに問題のその雪巨人を発見した。それは同時に相手も気付く事になる。

「...ほう。速いな...式堂兄妹。お前達がここにくるか。」

ラガウリ=ウェンディゴはゆっくりと近づいてくる。

「ラガウリ。お前の狼藉もここまでだ。再び、消えてもらおう。」

「はははははっ、我の前からにげだした小娘をともに連れているだけでか！」

この言葉にステイトがすこしむっとする。

「私は無視か。」

「さあて、我の狼藉がここまでといったな...お前達がどこまでできるかを見せてもらおうか！」

遅い足ではあるが一気に走ってくる。すでに身長が6mもある巨体の踏み込みによって、家屋の軒先に積もった雪が屋根から滑り落ちてくる。

「...計画どおりにいくぞ。」

「わかっている」

ラガウリの目標はまっすぐに甲斐那。大きな腕がふるわれ、甲斐那の身体を捉えようとするがまったくかすることさえない。

「餓鬼とかわらん...否、あちらのほうがまだ素早かったぞ。」

甲斐那は一気にスパートをかけずに堅実に相手の身体を切り刻んでいく。もっとも、どこまで効果があるのか疑問ではあるが。

「その強がり...どこまで持つかな。　　ブフ！」

ラガウリ=ウェンディゴから氷の塊が飛ぶ。その狙いは甲斐那...ではなく、その足元。

「...なに!？」

地面にあたった氷の魔法は甲斐那の脚元を凍らせ...甲斐那の脚を滑らせる。姿勢が崩れた瞬間を狙い、ラガウリの腕が甲斐那を捕らえようとして

「甘い！」

薫の一撃が繰り出され、ラガウリは僅かだが姿勢をくずし、狙いがそれる。

「すまない。助かった。」

「よかことです！」

ラガウリは薫に豪腕を揮うが、薫はその一撃を見切り、腕の上に飛び乗ったかとおもえば、そのまま跳躍しラガウリの顔まで飛び上がる。

「神咲一灯流...閃影斬！」

煌きを伴ったその一撃はラガウリの左眼を巻き込み傷つける。

「ぐおおっ！！」

ラガウリは残った右目で薫の姿をとらえ、その着地すれすれを狙いに入ったが

「燃えろっ！マクフラーム！！」

「焰の蝶よ舞散れ！」

ステイトと刹那の火炎魔法がラガウリの身体を焼き尽くしにかかる。その二人の狙いは傷ついた左眼の傷。爆炎と爆散を繰り返すその一撃でラガウリは薫にたいする攻撃を諦めざるを得ない。

「よし、効いてる！」

ラガウリ=ウエンディゴはすこし後にたたらを踏む。

「く...なかなかやるな...。」

「まだだ！！」

聖の右手にある紅い刀身の刀が一闪されるとそこから炎の塊が放たれる。それは寸分違わず、ラガウリの左顔に命中、その部分を焼き尽くす。

「ぐおおおおおおおっ！！！！」

ズン...と、ラガウリ=ウエンディゴは倒れる...が、すぐに立ち上がる。

「...くふふ...くはははは...貴様ら...」

その右目には異常なほどの憎しみのようなものがあつた。

「よかろう...お前たちにこの我の切り札をみせてやろう！」

ラガウリ=ウエンディゴは大きく降り積もった雪の中にその腕をつっこむ。そして...引き出した腕のなかにはジャックフロスト。

「この吹雪を更に強めてくれるわ...！」

ステイトが叫ぶ。

「まさか、喰らう気か！？」

ラガウリ=ウエンディゴから黒い霧が吹き出たかと思えば、みるみるうちにそのウエンディゴは小さくなる。だが、ジャックフロストはどんでんかかくなっていき...

「ヒーホー！」

ジャックフロストがそう叫んだ時に竜巻のようなブリザードにその身がつつまれ、その竜巻が消えたのちには王冠を被った雪だるまがそこにいた。

「ヒーホー！、どうだ。我の力を思い知れ！」

王冠被った雪だるま...DDS では魔王キングフロストと呼ぶ...は、今まで以上の寒波を飛ばした。

「死ぬがいい...マハブフダイン！」

瞬間のうちに周囲の熱が奪われていく。

もともと魔法に対しやや高い耐性をもつ甲斐那と刹那には今ひとつな効果だったが、他の三人には十分なまでの威力を持っていた。魔法の脅威が去ったあとには膝をつく薫とステイト、剣を杖代わりになんとか立っている聖。

「如何...これは危険だ。この寒波を長く浴びるわけには...」

甲斐那は刹那と視線を交わすと、甲斐那が薫と聖を、刹那がステイトを引きずって一度撤退する。

「く...殺ったとおもったのだから...」

直接風の当たらない、適当な頑丈なビルの中に駆け込んでステイトは口惜しく自嘲する。

「ラガウリにとってみれば、悪魔がいればそれに乗り移ればすむということ...か。だが、この現状であの雪だるまに身体を変えるのはかなり都合がいいことばかりだからな、状況に合わせてるといってもいい。」

ジャックフロスト並びにキングフロストは冷え切った今のような状況だと、傷ついた身体を天候で直す事が可能である。

「ここにあるのは...小麦粉に砂糖に...というか商店なんだな。」

薫がたくさんあるそれを眺め、あるものを見つける。

「木炭...」

薫はその商店の店内にあるもの。そしてここが「帝都区」であることから一つの手を4人に提案してみた。

「...確かに可能だが...これを担ぐ量には限りがある」

と、甲斐那が難渋をしめしたときにズパーンという爆音とともに、ある声が聞こえてきた。

「**巴里華撃団、ただいまここに参上!!!**」

> **Time 17:28**

「...なんだ、お前らは...」

「そこまでです！この帝都区での狼藉は私たち巴里華撃団が許しません！」

エリカ機からその音声が響いたあと、大神機から通信が全機に入る。

「時間を掛けるわけにはいかない、皆『火』作戦でいっきに片をつけるぞ！」

「はい、隊長!!!」

全員はラガウリ = キングフロストを包囲するように動くと、いっきに攻撃を仕掛ける。

マシンガンの連弾、槍の一撃、その他もろもろの攻撃をラガウリはその身にあびるが、まったく揺るがない。

「な...なんてやつなんだ!？」

「ふん、それまでか。」

ラガウリはしばし、冷静に相手の様子をうかがっていた。

建物の中から甲斐那とステイトの二人が華撃団の戦い振りをみていたが...

「ダメだな...殆ど効果が無い。あっても、この寒波の中では自動再生のほうが速い。」

ステイトの分析はそのまま甲斐那の分析でもあった。

「ステイトくん...あのへんな鎧甲冑から蒸気のようなものが吹き出てるが...あれは？」

「ああ、蒸気機関で動いているという話だ...蒸気!？」

ここでステイトがはっとしたようにあることに気付く。

「まずいぞ...今回の相手は華撃団にとって最悪の相性の敵だぞ...。」

そして、華撃団はその、弱点に気付いているような節がない。

「甲斐那殿」

「なにかな？」

「あの華撃団を助けに行く。...あの程度の鎧、切れる？」

「多分、な。」

二人は積雪に隠れ、ラガウリに気付かれないようにその戦闘の場へと近づく。

一方、そのラガウリも鎧甲冑から噴出している煙がなんなのかに気付く。

「...ヒーホー、私の勝ちだ。巴里華撃団。お前たちは私の前には無力! マハブフダイ
ン!!!」

その叫びと共に、世界が、空間が軋みをあげた。

究極の冷氣魔法が放たれた瞬間、絶対零度とは言わないまでも、それに近づく域にまで一気に冷え込んだのである。

もっとも吹雪といえども外の外気の方がはるかに熱量では魔法の範囲内の熱量より上にあるため、すぐにその極限の冷え込みはなくなるのだが...光武を無力化するにはそれで十分だった。

凍ってしまった水は蒸気になるまでに時間がかかる。

否。

すでに外気が異常な冷え込みを見せている現状では水を溶かすことさえ出来ない。

動力供給を失った霊子甲冑はそのまま動かなくなり、氷の中に埋まる樞となった。

「く、動け、動け!」

大神はがちゃがちゃとレバーやスイッチを操作するが、霊子甲冑はうんともすんとも言わない。それは他の機体も同じようなものだった。

「ヒーホー!ヒーホー!!!」

ラガウリは大きく哄笑する。

「...いかな、この身体で笑うとなぜかヒーローになる。どういうことだ？」

ラガウリは霊子甲冑を一瞥するとゆっくりと近づく。

「先ほどの人間にくらべると...こちらの甲冑の方が危険視せねばならんな。魔力や霊力と
いったものは弱々しくなったが、無視するわけにもいくまい。」

キングフロストの腕が大きく掲げられる。

「いかな...エリカ、エリカー！」

限られた視界の中にその光景を捉えたグリシーヌが叫ぶがキングフロストの腕はそのまま振り下ろされる。

「エリカーッ！！」

「マクフラーム！！」

グリシーヌの叫びに重なるようにステイトの魔法が放たれる声がある。ステイトの腕から放たれた炎はそのままラガウリ＝キングフロストの腕を吹き飛ばす。基本的に雪の身体ゆえに炎を浴びるとあっというまに吹き飛ばす。もっとも、一秒もかからずに生え直るが。

「無敵か！」

ステイトの腹立たしい声。

「甲斐那殿、操縦者の救出を！」

「わかっている...が、これはまったく動かないぞ。」

すでに積雪と氷でハッチは開かない。もっとも甲斐那にはハッチの開け方自体不明だが。

「すまんが...斬る！」

霊子甲冑のシルスウス鋼板をものともせず、甲斐那の剣閃が霊子甲冑を切り裂き、中のパイロットをみえるようにする。

「な...」

最初に助けられる事になった大神はその太刀筋に驚きを隠せない。

生身の人間が、動作はしていないものの、霊子甲冑をやすやすと切り裂いたのだ。驚かないわけがない。

「大丈夫か？」

「...ああ。」

と、このときエリカ機が突然動き出した。

「やったー！、隊長、動いたです～！」

素直に喜ぶエリカ。

まあ、マクフラームの余波で蒸気機関の水タンクが溶けて蒸気機関がきちんと動作し始めただけなのではあるが...

が、ここでラガウリが見逃すわけもない。ステイトの魔法とラガウリの魔法が競り合う...が、あまりにも分の悪い勝負である。甲斐那はなれた手つきでつぎつぎと操縦者を救出。なかには子供が混じっていた事に驚きを隠せなかったが。

結局戦術的撤退...というか退却を余儀なくされたのである。

> Time 17:35

「...テレビでみたことがある。たしか...シャノワールの...」

薫が巴里華撃団の面々と相対したときにそう声をかけ、頭を一振りして。

「神咲薫といいます。ラガウリを倒すために協力しましょう。」

と、隊長である大神一郎に手を指し伸ばした。

結局のところ、エリカ機がグリシーヌ機を引っ張る形で撤退。大神、コクリコ、花火、口ベリアの4人は甲斐那に引きずり出されての退却である。ほとんどまったくにもできないままに相手の攻撃魔法一発で無力化されてしまったのだ。流石に悔しい顔をしている。

「このままだと東京都が凍りつく...どうにかならないのか!？」

「どうにもならない...なんてことはうちらがさせはしません。」

薫はそういうと華撃団の人間にも考えだした計画を打ち明ける。

「うまくいくかな？」

「わかりません。」

大神の問いに首を横に振る。

「でも、確実な手など、いまの現状では全くありませんから。」

薫の言葉に頷く大神。だが、その方法を聞いた口ベリアは只一言。

「それなら自衛隊とかが出たほうがよくないかい？」

「そうかもしれませんが。ですが...あくまで、その計画は環境を、ほんの一瞬でもいい、うちに有利にするためのものなんです。最後のとどめは...きっと魔法でない。」

「...わかった。あたしからはもう何も言わない。黙って手伝うよ。隊長。」

「ああ。」

ここでステイトが気付いたかのように携帯を取り出す。

「あの混乱の中で忘れてたが...これで美神美智恵氏にも連絡を入れられる...だったな、聖？」

計画の準備のために道具を引っ張り出してきていた聖はいきなり声を掛けられ頷く。

「そういうことだけ。」

「そうか。では連絡。」

> Time 17:40

議事堂。

閣議の席は今回の騒動のことで話し合っていた。

と、そこへ美智恵がはいつてくる。

「なにかあったの？」

「...巴里華撃団が敗走したとの連絡が入りました。」

閣議に参加していた多くの人物がこの一言でいきなり顔色が変わる。

華撃団出撃の報は入っており、今回の事件もそろそろ終わるだろうと思っていたがゆえにこの一言は、希望の光が消えたように打ちのめすに十分だった。

「...それだけ？」

「いえ、本件に駆り出していたGSのうち1人から、ある提案がだされまして...それで、大規模破壊活動に繋がる行為を行なうが構わないかということと...この作戦が失敗した場合は自衛隊による攻撃を実施してほしいとのことですよ。」

「...自衛隊の出動...ですか？」

すでにブリザードの外に目を移す。

「...作戦案は？」

美智恵が鷺羽ちゃんにその作戦案を話す。

「...なるほど、それは一步間違えれば大規模破壊活動に繋がるわね。でも、どうやって火炎魔法の使い手を守るのかしら？」

「霊子甲冑と、それこそ雪の中に入れてでも使うそうです。」

「...じゃ、ちょっとまって。このアドレスのHPを見るように言って。」

「...？」

「その作戦案は成功するという鷺羽ちゃんからのお墨付き、ということよ。」

そして、加治首相は首相権限で大規模破壊活動行為につながるその作戦を承認。こうして、ラガウリとの決戦の舞台はクライマックスへと近づいていった。

「 作戦失敗となった場合は軍を投入して帝都区を焼いてでも倒すんだ 」

最悪の事態にならないことを加治首相他、閣議のメンバーは祈るのだった。

さて、現場。

「とにかく、木炭関係は本体よりも粉になったほうを集めてください。」

「砕こうか？」

「...ステイトさん、できますか？ ...時間を掛けないで。」

「ん...ヴァーン。」

樽の中に木炭を詰め込み風の魔法を投げやり気味に掛けるステイト。すると、もののみごとくに破碎され、粉々になっていた。

「...これでいいか？」

「ありがとうございます。」

そとでは霊子甲冑がプロパンガスのボンベを持ってきていた。

「これが爆発物とはな...」

「ちょっと信じられませんねー。」

「エリカ、ここでこけるんじゃないぞ。」

作業は急ピッチで進み、僅か10分で決行可能なレベルになった。まあ、単純に粉類を土嚢袋に入れなおし、軒先やら天井やらとにかく置けるところとにかく置いただけだし、プロパンガスのボンベをすぐに相手になげれるような位置に並べただけなのだが。

そして、決戦の時がくる。